「あれ？」
虎徹はバーナビーの顔を見る時に、以前よりもやや目線を上げなければならなくなっていることに気が付いた。
「もしかして、お前、背、伸びた？」
「オジサンが縮んだんじゃないんですか？」
「だっ…そ、そんなわけ…ない、と思うけど…身長まで減退したのかよ、俺？」
「あはは…冗談ですよ。僕、まだ少し伸びてるみたいです」
「あ、そ」
ホッとするやら、悔しいやら。今日の虎徹はバーナビーに驚かされたり、喜ばされたり、からかわれたりと、良い様に振り回されている。何だか負けているような気がして面白くない。虎徹はむくれた顔をしながら最後のカップを濯いだ。
「はいよ、これでラスト…」
虎徹がバーナビーにカップを渡そうと横を向いた瞬間、バーナビーは虎徹の唇に自分の唇を優しく重ねた。虎徹は呼吸を止めた。
うそぉ！バニーが俺にキスしてる?! まさか！バニーがそんなことするわけ…。
チュッと小さな音を立ててゆっくり唇が離れると、バーナビーは虎徹の頬をそっと撫でた。虎徹は口元を片手で隠して俯いた。
「お前さ…オジサンおちょくるのもいい加減にしろよな。こんな冗談タチ悪い…」
「冗談じゃありませんよ。冗談で男性にキスできるほどの度胸を僕は持ち合わせていません」
バーナビーの声はとても落ち着いていて、冗談じゃないことは充分に伝わる。バーナビーは虎徹の細い腰に手を回して力強く抱き寄せ、もう一方の手を背中に回し、虎徹を胸の中に閉じ込めた。バーナビーは虎徹の耳元で囁いた。
「僕はあなたが好きです。こんな気持ち、他の誰にも抱いたことはありません」
虎徹の心臓が跳ねる。驚きと喜びで、どうしたらいいか分からない。混乱して、バーナビーの胸を手で押し返そうとするがバーナビーの身体はびくともしない。
「で、でもっ！お前、これは…ちょっとやりすぎじゃない？」
「覚えてないんですか？恋だって言ったでしょ？これぐらい普通でしょう？っていうか、これからもっとすごいことしますよ、僕」
「えっ ?! すごいこと…って…せ…セックス？まさか俺、相手に…？」
「他にいないでしょ？」
「ちょ、ちょっと待てって！」
「僕のこと嫌いですか？」
バーナビーが悲しそうな目をするので、虎徹は焦ってまくし立てた。
「そ、そんなことはないぞっ！生意気なとこもあるけど、ちょっとは

SAMPLE